

東海メールクワイアー 第65回定期演奏会 6/23 大中恩 生誕100年記念 東海メールクワイアー会長 都築義高



苦難を越えて！開催出来た喜び！

東海メールの恩人！大中恩先生に感謝をこめて！

5年間この日を待っていた。コロナ禍のため練習も出来ず、団員は半減してしまい2年遅れで、ようやく開催に漕ぎつけた2022年6月開催の第63回ウィーンの調べ定期は、人数が23人。団員の熱演もあり成功だったが、聴衆は440人。昨年の高田定期は、30人の団員で、これまでの内容を維持したが、聴衆は800人で大赤字となった。30人の団員では、これまでの愛知県芸術劇場コンサートホール1800席の会場で定期開催は出来ない。1000席の名古屋市民会館ヴィレッジホールが希望の6月23日で苦勞してなんとかとれた。

指揮には、高校時代に東海メールの団員となって大中先生と知り合い、東大入学後に大中先生主宰のコールMegで三年間歌い、東大卒業後、東京芸大作曲科に入って作曲家となった新実徳英先生にお願いした。ピアノは合唱団「空」と

東海メールの専属ピアニストで新実先生の信頼厚い内匠慧さんをお願いした。開幕は、団内指揮者鈴木順の指揮で、丁度60年前、1964年に大中先生に書いて頂いた阪田寛夫作詩の団歌「いとおいしい日々」。大中先生との深い絆を確認しながら歌い、熱烈な共感を得た。

第1ステージの伊藤海彦作詞「明治百年記念・男声合唱とピアノによる蒸気気車への讃歌 走れわが心」は、名古屋を本拠とする東海ラジオが、全日本コンクール3年連続優勝して絶好調の東海メールを起用して、1968年芸術祭奨励賞を受賞した大曲。男性の生き様を蒸

気機関車の走る一生に託して描いた感動作。水谷昌平先生の指揮で放送初演して以来、東海メールの大事なレパートリーにしている。ワンステージメンバー15名が加わって、総勢50名で、再生の喜びを希望に満ちて、一緒に走り高らかに歌い上げた。今回は、合唱団「空」の中高生がトップに加わり、輝かしい響きが圧倒的。

第2ステージは、落合恵子の詩による、アルトと男声合唱のための組曲「言葉はあるのに」(1980コールMeg初演)。アルトには、一昨年の第65回定期で「アルト・ラブソディ」で絶賛を博した福原寿美枝さんをお迎えした。

40年ぶりの甦演。甘美な恋が絶望の破局に至る。フランス映画を観るが如き、ミステリアスな魅力溢れる10分足らずの小組曲。福原さんの考え抜かれた構成が、魅力的美声で表現され、聴衆の心を深く捉え感動を呼んだ。

第3ステージは、堀口大学の詩による男声合唱組曲「ヴェニウス生誕」。このステージだけ団内指揮者の鈴木順が指揮。この曲は1979年1月15日大中先生から、「大人の合唱曲が出来たよ。東海メールで歌ってくれないか。」と手渡されたもの。ずばり、東海メールのために書かれた曲。全編女性賛美に溢れて、少し気恥ずかしいのですが、正面きって歌うと、楽しい。男声合唱でしか表現できない響きがある。第三曲「ヴェニウス生誕」のメロディーの綺麗なこと。カンタービレ。生な言葉で聴衆は驚いたようだったが、大人の合唱団でしか出来ない味わいに酔いしれたようだ。(つづく)

第4ステージは、アルトと男声合唱のための組曲「**谷川俊太郎の詩による五つの歌**」は、私が指揮していた名城大学理工合唱団の1982年12月の第18回定期演奏会のために、大中先生から送って頂いたもの。この曲は、歌曲をアルトと男声合唱のために編曲したもので、組曲としてまとめて演奏したのは、これが初めてだと分かった。この初演に当時大学4年生で歌った**祖父江秀明**さんと**有田仁一**さんが今回の定期で歌った。楽譜が無いので、有田さんが保存していた名城理工合唱団初演の手書き楽譜と鈴木順所有の大中先生直筆手書き無伴奏楽譜を基に浄書作成し、楽譜を東海メールクワイアから出版した。42年ぶりの蘇演となった。新実先生の緻密な構成、内匠さんの華麗なピアノ、福原さんの谷川の詩を徹底して読み込んだ劇的表現による名演となった。稀代の名曲、終曲の「**じゃあね**」に込めた大中先生の生き様が身に沁みた。

第5ステージは、ワンステージメンバー参加の伊藤海彦の作詞による長編合唱曲「**島よ**」。1970年芸術祭優秀賞を受賞した混声合唱曲を2003年に大阪メンズコーラスの委嘱で男声合唱に編曲されたもの。混声合唱曲の名曲として広く歌われている。私たちには、男の一生を島に喩えて歌い上げたものと思われ、感情移入して身につまされる。今回は新実先生の指揮で歌えるということと曲の魅力であろうか、全国から、九州のフレッシュメンコア、熊本デメテル、東京リーダーターフェル、コーロソフィア、名古屋グランフォニックに、この「島よ」の男声編曲を委嘱した大阪メンズコーラスの有田さんも加わって、2012年第55回定期以来、10回目にして最大の27名の参加を得た。東海メールを加え、全体60人という大人数。トップが何と17人で大迫力。新実先生の緻密な構成力と内匠さんの力強い華麗なピアノで、圧倒的な名演となった。

アンコールは、愛唱歌とも言ふべき「**草原の別れ**」を華やかに、福原さんがじょうじょう弱々からむラブソング「**こんな夜には**」を愛情込めて歌い上げ、聴衆に感謝を伝えた。

この3年間、毎回練習場が変わり、練習が出来なくなることもあり、参加者が減少する中でも、団員が東海メールを存続させる強力意思を持って練習を続け、今回、定期演奏会を開催することが出来た。アンケートを読むと、この大中定期の趣旨を良く理解してくれた聴衆が多いことが嬉しい。すべての仕掛けが上手く働いて大成功となった。これで、東海メールクワイアは存続して行ける。来年の北欧定期に向けて精進を重ねよう。

大中恩生誕100年記念公式ページ
<https://100th.ohnakamegumi.com/>

都築義高 Profile

1938年3月5日、名古屋市生まれ。現在、豊田市在住。

1960年、中部日本放送入社。ラジオ制作部、テレビ制作部、事業部でプロデューサー、ディレクターとして勤務。「日本の第九」で前島賞受賞。日本レコード大賞審査員。事業部で、水戸室内管弦楽団、朝比奈隆指揮大阪フィル招聘。1998年定年退職。モンテカルロ・オペラ、ハンブルク・オペラを招聘。1997年から2008年まで、中部大学にて、芸術学講座、オペラ講座、映画講座を担当。名古屋フィルハーモニー交響楽団アドバイザー、東海テレビ放送 スーパークラシックコンサート アドバイザーを歴任。

1956年東海メールクワイア入団。マネージャーとして、邦人男声合唱作品委嘱活動を推進し、全日本合唱コンクールにて、1964年から三年連続優勝を成し遂げる。1971年、日本男声合唱協会JAMCAを設立。全国組織の実績ある団体に育て上げる。1985年より東海メールクワイア会長職を務め、1990年から、高田三郎先生のご指導を受け、2000年高田先生の帰天後、須賀先生等に編曲委嘱した「男声典礼聖歌」「心の四季」等の楽譜を出版。「高田男声典礼聖歌」の普及を目指し、全国組織の「高田典礼聖歌男声合唱団」を結成。2010年の「アッシジ・ローマ平和の祈りツアー」と2013年、ヴァチカン公国から招聘された「サン・ピエトロ大聖堂荘厳ミサ」をプロデュース。サン・ピエトロ大聖堂で歌った「高田男声典礼聖歌」は、ヴァチカン公国から認められた。文化庁より「地域文化の振興に貢献している」として、「平成30年度地域文化功労者表彰」受賞。愛知県教育委員会から、「愛知県教育表彰 文化功労者」を受賞。



【編集部より】

日本男声合唱協会(JAMCA)は、男声合唱活動の振興に寄与する事を目的として1971年に創設。主な活動は、約2年に一度、全国各地で男声合唱による演奏会やイベントを開催。また、機関誌「じゃむか通信」の発行、男声合唱に関することならば何でも答えるリファレンス、楽譜・CDの発行なども行っている。当初は、5団体から始まったが、現在では全国の一般合唱団、大学合唱団、男声合唱愛好家が加盟し、会員数は100を越えた。男声合唱団同士の繋がりが強くなり、全国に仲間がたくさん増えている。

公式サイト：<http://jamca.web.fc2.com/>